主日礼拝説教要旨　　　　　　　　　　　　　　　　　　2014年２月２３日

**「外へ出て、激しく泣いたペテロ」**

新約聖書ルカによる福音書第２２章５４－７１節

それから人々はイエスを捕え、ひっぱって大祭司の邸宅へつれて行った。

ペテロは遠くからついて行った。人々は中庭のまん中に火をたいて、一緒にすわっていたので、ペテロもその中にすわった。

すると、ある女中が、彼が火のそばにすわっているのを見、彼を見つめて、「この人もイエスと一緒にいました」と言った。

ペテロはそれを打ち消して、「わたしはその人を知らない」と言った。 しばらくして、ほかの人がペテロを見て言った、「あなたもあの仲間のひとりだ」。

するとペテロは言った、「いや、それはちがう」。

約一時間たってから、またほかの者が言い張った、「たしかにこの人もイエスと一緒だった。この人もガリラヤ人なのだから」。

ペテロは言った、「あなたの言っていることは、わたしにわからない」。すると、彼がまだ言い終らぬうちに、たちまち、鶏が鳴いた。

主は振りむいてペテロを見つめられた。

そのときペテロは、「きょう、鶏が鳴く前に、三度わたしを知らないと言うであろう」と言われた主のお言葉を思い出した。

そして外へ出て、激しく泣いた。

イエスを監視していた人たちは、イエスを嘲弄し、打ちたたき、目かくしをして、「言いあててみよ。打ったのは、だれか」ときいたりした。 そのほか、いろいろな事を言って、イエスを愚弄した。

夜が明けたとき、人民の長老、祭司長たち、律法学者たちが集まり、イエスを議会に引き出して言った、「あなたがキリストなら、そう言ってもらいたい」。

イエスは言われた、「わたしが言っても、あなたがたは信じないだろう。また、わたしがたずねても、答えないだろう。しかし、人の子は今からのち、全能の神の右に座するであろう」。

彼らは言った、「では、あなたは神の子なのか」。

イエスは言われた、「あなたがたの言うとおりである」。

すると彼らは言った、「これ以上、なんの証拠がいるか。われわれは直接彼の口から聞いたのだから」。

ディボーションノート　８　　2014年２月２４日―３月１日

|  |
| --- |
| ２月２４日(月)　詩篇１２３篇  信仰とは、信じ仰ぐことです。天を仰ぎ、そこにおられる神にむかって目をあげることです。天とは上空の青空ではありません。わたしたちを越えた世界のことです。神のおられる所です。天に向かってとは、神に向かってと言い換えられます。漠然と空を見上げるのではありません。神よ、わたしたちの主よ、と神に向かって目をあげて呼びかけるのです。祈るのです。その集中する姿は、しもべ(男の奴隷)がその主人の手の動きに目をそそぎ、はしため(女の奴隷)がその主婦の手に目をそそぐように、そしてすぐに反応できるように、わたしたちも神の僕として目をそそぐのです。わたしたちの天の主人は、実にあわれみ深い神です。苦しんでいるわたしたちが神に目を注ぐとき、わたしたち以上にわたしたちに目を注がれ、わたしたちの受ける嘲りや苦しみを見つめていてくださる神を見上げるのです。主よ、あなたはわたしたちの悩みを見ていて下さるのですね。不安を振り捨てて、信じて踏み出します。導いて下さい。主よ。 |
| ２月２５日(火)　詩篇１２４篇  「都もうでの歌」とは、エルサレムの神殿に巡礼をする時の歌です。荒野を歩む旅を、この歌が支え、力を与え、希望と勇気を与えたことでしょう。「主がもしわれらの方におられる」とは、「主がわたしたちの味方である」という意味です。信仰者にとって、神が自分の側に味方として、援護者・弁護士として付き添っていて下さることは、大きな力です。本当は神のそばにわたしたちの方が付き添っているのです。ですから神から離れるなら、わたしたちの人生が空しくなると分かります。人生で、突然に逆らって立ちあがるような人間関係の問題が起こっても、怒りがわれらにむかって燃え立ち、理由も分からないままに孤立してしまったとしても、味方である神は変わらずに味方です。わたしたちの側にお立ちです。原因は相手にあるかも知れません。慌てずに静まって祈るなら、わなをのがれる鳥のように解決へと向かいます。「われらの助けは天地を造られた主のみ名にある。」 |
| ２月２６日(水)　詩篇１２５篇  主に信頼する者は、動かされることなくて、とこしえにあるシオンの山のようである。 わたしたちが信じる神は不動のお方です。その神を信じる信仰も同じです。やむ終えない理由以外は、教会を動かないことです。主イエス・キリストを愛するように、加えられた教会を愛し、その群れに加わり続けることです。神は各教会を御手で囲まれ、正しい道に導き、善良な人と心の正しい人とに祝福を施してくださいます。教会は確かに人の集いですが、毎週、聖書の言葉によって新しくされ、改革され、主イエス・キリストのお体としての成長を遂げて行きます。ここに神の国が始まっています。 |
| ２月２７日(木)　詩篇１２６篇  われらは夢みる者のようであった。神が見せてくださる夢は素晴らしいものです。坂戸キリスト教会の60年の歴史も「夢見るよう」でした。シュルツ宣教師が書かれた「主に遣わされた毎日」(日本ホーリネス教団1500円)の12月10日の箇所に、1953年夏に坂戸で始まった天幕伝道の苦労が記されています。断食して祈り、炎天下でトラクトを配り、連日連夜伝道集会を続けた涙の種まき。それは40年後に夢見る喜びの収穫に変わります。1954年に高橋五子師が赴任され坂戸キリスト教会が誕生します。1994年、坂戸文化会館で大メサイアが行われ、シュルツ宣教師は招待されます。そこで先生は、50名の聖歌隊と25名のオーケストラによる「メサイア」(救い主)を聞かれたのです。「その時われらの口は笑いで満たされ、われらの舌は喜びの声で満たされた。その時『主は彼らのために大いなる事をなされた』と言った。」ネゲブの川はいつもは水が流れていません。雨季に川となり回復されます。こんなところに川が流れるとは。神が与えて下さる収穫は思いがけないものであり、涙を流して出て行く者は、束を携え、喜びの声をあげて帰ってくる驚きの出来事です。 |
| ２月２８日(金)　詩篇１２７篇  ソロモンの歌かは分かりません。時代はもっと後だと思います。神殿は彼の父のダビデが多くの資材と資金を準備しましたが、神は建てることをダビデにはお許しにならず、ソロモンが神殿建築を行いました。「主が家を建てられるのでなければ、建てる者の勤労はむなしい。」この部分からソロモンが思い出されたのでしょう。創世記の3章には、人間が神に背いて罪を犯したとき、蛇と女と男とに、神がそれぞれの苦しみをお与えになり、男には「一生苦しんで地から食物を取り」「額に汗してパンを食べ、ついに土に帰る」と言われたとあります。呪いのもとにある労働を、罪からの救い主イエス・キリストが、恵みに感謝しての労働に変え下さいました。感謝してタラントを活用する喜びの労働になりました。神を無視しての労働は、自己目的だけとなり、呪いのもとにある労働にもどりやすいのです。繰り返し歌われていることは、主にある、主の手の中にある恵みです。「主が町を守られる」「主はその愛する者になくてならぬものを与えられる」。空しくない辛苦の糧を得ましょう。「朽ちる食物のためではなく、永遠の命に至る朽ちない食物のために働くがよい。これは人の子があなたがたに与えるものである。父なる神は、人の子にそれをゆだねられたのである。」(ヨハネ6章27節)。 |
| ３月１日(土)　詩篇１２８篇  神を畏れて生きる者の祝福された人生を賛美しています。まずその人自身が、主なる神をおそれ、神の教える道に生きることから始まります。仕事の祝福が、「あなたは自分の手の勤労の実を食べ、幸福で、かつ安らかであろう。」と約束されます。仕事に就くことが難しい今の日本の状況ですが、失望しないで神を信じて挑戦してゆきましょう。道は必ず開けます。次の祝福は家庭です。「あなたの妻は家の奥にいて、多くの実を結ぶぶどうの木のようであり、あなたの子供たちは食卓を囲んで、オリブの若木のようである。」教会には独身の方々も集われています。わたしたちは神の家族として共にひとつの体を作っています。決してひとりではありません。共に生かされていることを心に刻みましょう。その上で、教会学校の子どもたちの祝福をお祈りしましょう。「見よ、主をおそれる人は、このように祝福を得る。」数えてみよ主の恵み。祝福のもっとも根本のものは、主イエス・キリストによる罪からの救いです。 |